

分解の哲学

——「食」をめぐる脱領域的考察——

藤原 辰史（京都大学）

A Philosophy of 'Decomposition'

— *Trans-disciplinary consideration of 'eating'*

Tatsushi FUJIHARA

This paper reconsiders how we can explain the connection between social and ecological phenomena. To that end, I will use the concept of 'decomposition,' which is an important term in ecology and refers to the destruction of something by natural chemical processes. Bacteria, small insects and similar constantly decompose natural waste materials that remain after living organisms, such as 'producers' and 'consumers' have been broken up. We can also easily find 'decomposers' inside human societies, who also destroy such detritus and waste and reuse or recycle it. For example, since the Edo period, lower-class people in Japan have reused waste as a valuable material for producing recycled paper such as a community called "*Arinomachi*" (Town of Ants) in Tokyo. Also, a lot of artists like Kurt Schwitters and Pablo Picasso were strongly interested in discarded things as materials for reconstructing conventional view of art. In using this concept, I aim to criticise the general tendency of social and natural scientists to attach weight to 'production' and 'consumption' in describing social and ecological phenomena.

Keywords: decomposition, ecology, waste, art, recycle

キーワード: 分解、生態学、廃棄物、芸術、リサイクル

はじめに

ご紹介いただきました、藤原辰史と申します。午前中から参加させていただいているのですが、歴史学を主な研究の領域としている私にとってはまさに「フィールドワーク」で、哲学の学会に出るのは人生で初めてだと思います。すべてが真新しく、本当に楽しい時間を過ごしております。手を挙げなかったのは、ひとえに皆さんが沢山手をあげていらっしゃったから質問できなかったにすぎません。

今日は「分解の世界」というテーマで、食をめぐるお話をさせていただきます。先ほど申し上げましたように、私の専門は歴史学です。読んでいるもののほとんどは「形而下」です。形而上的なことについては論じるのはそれほど得意ではありません。たまたま『分解の哲学』という書物で哲学にチャレンジをしてみました。この本でさえも基本的には歴史学の、どちらかという生臭い話からしか考えられておりません。今日もお誘いいただいた安部浩先生から、無理にハイデガーに合わせなくていい、と事前に言っていただいておりますので、もしハイデガーと何の関わりがあるのかと質問される方は、安部先生に質問をしていただければお答えをいただけると思います。

捨てられる食と服

私は歴史学の中でも、食や農、特に農業技術や食の技術というテクノロジー、現代技術の問題にずっと取り組んでおりまして、『トラクターの世界史——人類の歴史を変えた「鉄の馬」たち』（中公新書、2017年）はまさにそんな関心から書いたものです。技術に関心を持ち始めた理由はたくさんあるのですが、実は大学の教員になって二年目くらいに、人文科学研究所の音楽学者や思想研究者たちと一緒に、ハイデガーの技術論を一年くらいかけて回し読みしたことがあります。最初はチンプンカンプンだったのですが、読んでいくうちに面白くなって、歴史学でしか考えてこなかった「技術」というテーマが、人文学のテーマになりうることに気づいたことが実は背景にはあります。ハイデガーの技術論は「馬鹿の一つ覚え」のようにずっと私につきまとって、化学肥料にせよ、トラクターにせよ、品種改良にせよ、いつも Ge-stell という概念から自由になることはありませんでした。かといって全面展開する能力もなく、「農業技術への問い——ハイデガーの概念「育む hegen」について」（『現代思想』46巻3号、2018年）で論じるまで、Ge-stell という概念は一度も用いたことがありません。

農業技術の体系というのはそれぞれ孤立しているわけではありません。開発された品種が指令となり、その遺伝情報に基づいて、化石燃料を用いて工場で製造された化学肥料や農薬が必然的に組み合わせられていく。ロックフェラー財団やフォード財団の膨大な資金によって、メキシコ（小麦とうもろこし）とフィリピン（米）の国際研究組織が作り上げたこの農業技術パッケージこそが戦後世界の人口爆発の大きな原因の一つであると言われるほど、飛躍的な農業生産をもたらしました。他方で、高価なパッケージを買わざるを得ない開発途上国の視点に立つと、環境破壊や生活破壊をもたらしたという負の側面も見逃すことができません。1960年代に登場し

たこうした動きを、「緑の革命 Green Revolution」と言います。この名前は、アメリカの高官によって、主として「赤の革命」（共産主義革命）に対するアンチテーゼとしてつけられました。

研究を進める上で「分解」という言葉に辿り着いた問題意識の背景は、以上のような化学と石油による農業技術、そして、それに基づく食料の大量生産、大量消費、大量廃棄の社会がこの世界を覆っていることにほかなりません。つまり、廃棄されたものが、生産をしていくうちに溜まって行って海に廃棄されたり、山に埋められたりしています。その廃棄物が私たちの見えないところで私たちの世界を脅かしている。一番分かりやすい事例はフードロスです。それから服の廃棄も大きな問題になっています。パリ・コレクションやミラノ・コレクションでは、それに合わせて全世界のデザイナーが大量に服を作り、大量に販売され、大量に捨てられますので、大量の衣服や布の無駄が生まれているそうです。その服、ほぼ着ない服、一度も着ない服がゴミ箱に捨てられ燃やされ埋められる、という世界はどう見ても異常としか言いようがありません。

この前オランダのリドヴィッジ・エデルコートというファッショントレンドを予測することで名の知られた方が主催するワールド・ホープ・フォーラムという会に呼ばれて、分解の哲学について話したら反応が良くて驚きました。彼女自身も「分解の哲学」を英訳してほしい、と言っていました。というのも、今衣服の世界で起こっているのは、とにかく捨てるのが優先、捨てる中でたまたま手に取られたものが、タンスにしまわれるだけであって、それ以外のものはほとんどが捨てられる、という世界への違和感を抱くデザイナーやアパレル関係者が出てきているからです。これは食べものの廃棄の問題とほとんど変わりません。

ゴミとは要するに、海や山や川や土や体に棲む生きものたちが分解できない（人間たちが分解させない）で、物理的に燃やしたり、埋めたりする廃棄物のことです。食べものも衣服も本来的に「生きもの由来」ですので、自然に還るはずですが、商品になってしまったせいで自然に還らない。

老化にあらがう

もちろん、人間もだんだんと分解過程から遠くへ遠くへと向かっています。今日も午前中にお話がありましたが、人間もある種の自然的な存在だとするならば、この人間を捨てさせない、もしくは人間ができる限り若いまま身体の状況を保とうとする医療技術が、アンチエイジングという掛け声のもとで医学の中でかなり進んでおります。医学の技術という問いも、ハイデガーの技術論を考える上でとても重要ではないかと私は思います。

たとえば、日本の抗加齢学会のホームページ上では、人類はいつか寿命さえも乗り越える時代が来るのではないかと、そして若返りの可能な状況になればそれぞれの立場でそれぞれの臓器や組織の老化時計を調節できるのではないかと、老化はもはや病ではないかと、その医療技術によって私たちは老化を部分的にでも克服することができるのではないかと、ということを高らかに宣言しています。

たしかに老化に抗うことは人間の生の一つの重要な志向です。そうでなければ、人間は生きていけません。しかし、はたして「アンチエイジング」だけが人間の本質を表しているのでしょうか

か。人間が自分の皮膚を捨て、髪の毛がポロポロ落ちて、皺が増えていく、その老化という現象があまりにも嫌厭されすぎではないでしょうか。それは逆に、人間の生の充実を貧困にとらえることにつながってはいないでしょうか。

人間への暴力と自然への暴力

食品ロスは、——世界の食料援助量のほぼ 1.5 倍、日本だけで捨てています——私の研究を駆り立たせている一つのモチベーションです。これは、倫理に悖るからというよりは、かつて食べものの残りものは家畜が食べていたというパターンが消えていったことと関係しています。パッケージに詰められて、バーコードが貼られて、何月何日までもちます、と書いてあると、それを超えるとすぐにゴミ箱に捨てられ、燃やされる。食べものの商品化の問題がここにあります。

あと、食の問題を考えると欠かすことができない歴史は、お茶も砂糖もバナナもそうなのですが、食の歴史の中ではほぼ例外なく人間もまた「使い捨て」されていることです。奴隷解放令以前から、サトウキビや綿花の栽培での奴隷の扱われ方はご存知の通りだと思います。また、20 世紀では、バナナのプランテーションで行使された陰惨な暴力についても忘れてはなりません。ピーター・チャップマンの『バナナのグローバルヒストリー』（ミネルヴァ書房、2016 年）という本の中にあるのですが、たとえばユナイテッド・フルーツ社というアメリカの、今というグローバル会社が、南米、中南米のバナナ農園を運営していく中で、グロス・ミッチェル種という安価な黄色いバナナを世界の食卓に提供しておりました。現在の「チキータ」という企業の源流の一つです。本来バナナとは黄色い品種だけではありません。赤や緑など様々な色があるのですが、この企業がグロス・ミッチェル種を選んで大々的に宣伝して以降、「バナナ＝黄色」という図式が先進国の住人たちの脳に刻まれることとなります。

ところが、この企業は人間と自然の破壊を同時にもたらした、ということでも悪名高い企業でした。バナナはご存知の通り、木でなく草です。しかも遺伝的にすべて同一です。そうすると、もし病原菌に感染したらどうなるでしょうか。同じ遺伝子なので全滅しますので、ユナイテッドフルーツ社は火をつけて広大なバナナ農園を燃やし、また別の場所に移るということを、20 世紀初頭に繰り返していました。そんな中で労働者たちは簡単に切り捨てられていく。そしてまた新しい土地を手に入れて、低賃金労働者を雇って、過酷な労働を強いる。その繰り返し。ガルシア・マルケスの『百年の孤独』の舞台になったのは、まさにコロンビアにユナイテッド・フルーツ社が資本投入したバナナ農園の「マコンド」であることはあまり知られていません。1928 年 12 月 6 日にコロンビアでは「サンタ・マルタの虐殺」という大変有名な虐殺事件が起こっています。ユナイテッドフルーツ社が国を動かして現地の警察に、ストライキをうったバナナ農園の労働者を殺させる、という衝撃的な事例です。

培養肉

資本主義的なアグリビジネスの暴力はよく指摘されるのですが、最近はまだ別の食と農をめぐる技術問題が出てきました。培養肉です。これをハイデガーならば、どう論じたと思われますか。家畜の幹細胞をシャーレの上において培養液につけて、それを増殖させて食肉にするという技術です。この培養肉は今、地球環境を救うのに大きな役割を果たすという理由で、膨大にお金が出られている。レオナルド・ディカプリオやビル・ゲイツは、お金を投じてこの培養肉の開発を推進しています。理由は簡単です。牛がゲップを出すと、これは二酸化炭素の6倍以上の温暖化効果をもたらすと言われているからです。豚もたくさん飼料を食べ、生水を必要としますから、環境負荷が高い。もし家畜を殺さずに工場で肉が作れるようになれば、全部クリアできるのではないか、というモチベーションに突き動かされた世界的プロジェクトです。しかし、私は考えるのですが、生きものを殺さない食べものは果たして食べものなのでしょうか。

それから3Dプリンターゼリーですね。たとえば何かアレルギーを持っている子どもがものを食べたい時に、3Dプリンターを使って栄養素を全部入れて、ほぼ同じ形にして、ゴーグルをつけてゴーグルから香料を飛ばします。香料というのは今ものすごい技術で、あらゆる香りがほぼ再現できる技術があります。人間は味覚よりも嗅覚の方がセンシティブなので、その錯覚を使って、私たちは食べているふりをできるところまで来ている。これが食文化を変えるのではないか、ということが今言われています。しかし、ヴァーチャルが中心となる食事は、食事と言えるのでしょうか。

こういう風に「食」そのものが——植物工場もそうですけれども——もはや工場化されていたり、機械化されていたり、物質化されていたりする社会というのが、今日のテーマの背景にあります。しかもこういうことは、20世紀初頭から言われていました。のちに二・二六事件を起こす青年将校たちの精神的支柱であった北一輝は、1906年に自費出版した『国体論および純粹社会主義』の中で、人間が肛門を失っていくことが理想だと言っています。もう食べなくていい、排泄という汚い行為をなくし、美しいものだけで人間が完璧になっていく、ということが美の理想ではないか、と若い北一輝が書いていました。潔癖さの極みというべきでしょうか。そのためには食物というのはもはや化学調合と変わらないような未来が来て、それを肯定的に捉えています。

ウィストン・チャーチルも、1932年に刊行された『わが冒険・わが思想』で、これからはチキンを食べるときには、胸肉工場、もも肉工場というふうに分けて肉を製造したらいいのでは、ただ、お金を持っている人は美味しいものを食べるだろうね、ということを最後に言っています。階級が食の技術と切っても切れないことをチャーチルはちゃんと理解している。これまでは自然界の物質循環、分解過程の一部であった食べものの存在が根本的に変化している状況で、私はやっぱりもう一度、食べものが私たちの体を通しているものであるという観点から、つまり、「分解」というテーマから考えていきたいと考えたわけです。

生態学の分解論

では、「分解」とは何か。もう一度、北一輝に戻りましょう。肛門がなくなっていく、口だけになる人間像、といういわば「袋人間」がまさに若き北一輝の理想ですけれど、肛門は人間にとって原初的な器官です。最初に受精卵が細胞分裂していくときに、まず肛門から穴が空いてそれがどんどん進んで口に向かっていき、一本の管ができていきます。つまり、どんなにおしゃべりが好きな人でも「口から生まれた」のではなく、「肛門から生まれた」わけです。

そして、もう一つは、私たちの内部——これはいわばチューブですけれども——をつらぬく外界として腸管があります。とくに大腸にはびっしりと。体全体で40兆から100兆ともいわれるほどの数の微生物が棲んでいる。全部足し合わせると一キロになるという説もあります。ということは、私たちは、自分たちの細胞よりも多数の微生物と一緒に暮らして、生きていることとなります。それだけの微生物にたかられている人間とは一体何か、というところから人間存在をもう一度問えると思うのですが、いかがでしょうか。

そういう人間たちの微生物との共生というあり方は——絵本からとってきましたが（大野正男+松岡達英『地面の下のいきもの』福音館書店、1988）——土の中の状態とよく似ています。植物は膨大な根を張ってしまして、この根というのは、全部足し合わせると東京から名古屋くらいの距離になりますが、ここに小さな微生物が棲むように、わざわざ根は栄養素を土の中にばら撒いている、という研究が最近生物学の中でなされてきました。2022年11月に『植物考』（生きのびるブックス）という本を刊行したのですが、植物というのは、最近の動物ブームとはまたちょっと違った形で、色々なものを見せてくれます。とりわけ根と微生物の関係はとても重要です。内臓と土というのは、非常によく似ていて、どちらも分解者が主役になっています。

「分解」というのは生態学の用語です。生物の世界は、生産者（植物）、消費者（動物）、分解者（死体や落剥物を食べる生きもの全般）というカテゴリーに分けられます。あとでこれを批判します。英語ではこれを *decomposition*、ドイツ語では *Zersetzung* という言葉が通常用いられます。ハイデガーの批判する「立たせる *stellen*」ではなく、「置く *setzen*」という動詞が使われているのがポイントであると思います。ちょうど死体を地面に横たえるように、とても重力を感じる概念だと思います。ただ、このドイツ語はポロポロと崩れ落ちて、バラバラになって、点になっていく、というイメージなのですが、生態学は少し違います。この分解というのは、単にバラバラになっていく、というだけでなく、バラバラにした物質をもう一度還元して、植物の栄養にしていくというイメージがあります。つまり、U字回復みたいなところも含めたものがこの分解なのです。ただ壊すのではなくて、戻っていく感じが分解というプロセスにはあります。

私たちは亡くなって火葬されなければ土の上でも中でも生きものの餌となって食べられるわけですが、バトンリレーのようにいろんな生きものに食べられ続けて全部分解された後の物質は基本的に水と二酸化炭素とミネラルになりますよね。これは全部植物に必須のものです。あとは太陽光さえあれば光合成ができます。光合成ができれば植物がエネルギーをデンプンにしてくれます。このデンプンを食べれば動物が生きていけます。こういうふうに物質の円環構造が生

¹ この講演のあと、人間は生きものによってたかられた「すみか」であるという視点から論文を執筆した。藤原辰史「「たかり」の思想 ——食と性の分解論」『思想 特集：環境人文学』岩波書店、2022年11月号。

まれていくわけですが、これを可能にしているのがまさに分解です。ところが私たちが分解プロセスを、あまりにも「生産」という言葉で忘れ去ってきたのではないだろうか、というのが今日の問題提起です。「生産」も「消費」も経済学の用語で、実は、生きものの世界にはあまり馴染みません。

生態学の教科書（M. Begon, J. L. Harper, C. R. Townsend 『生態学 Ecology』（第四版、京都大学学術出版会、2013年、426頁））を見てみると、こういう風に書いてありますね。「分解とは、死んだ生物組織が徐々に崩壊することと定義され、それは物理的・生物的作用と両方ある」と。それで、最終的には二酸化炭素・水・無機栄養塩になって分解されて終わる、と書いてありますが、土壌学者は、植物栄養が再循環されていくその担い手が分解者であるととられます。たとえば、かつて土壌学者の久馬一剛は、土壌の働きを、「もっぱら生産者としての機能によって評価し、物質のリサイクルに果たしてきた土壌の分解者としての機能はほとんど評価されてこなかったきらいがある」（久馬一剛編『最新土壌学』朝倉書店、1997年、7頁）と不満を述べていました。これは何かというと、基本的に「土壌」は、マルクス経済学でも近代経済学でも「生産手段」として扱われ、生産するためのあくまで物質的基盤に過ぎなかった。久馬の不満の源には、土壌学もそれに引っ張られすぎてきたことがあると思うのですが、実は土壌というのは、あくまで色々な偶然が重なって、非常に多くの有機質・ミネラルを含んで、水分が通りやすくなって、勝手に植物の根やミミズが土壌を耕し、微生物が栄養素を変えてくれるような、そういう方向性があっちこっちに向かうような存在ですね。このような非人間的な土壌の見方は、土壌学でも初期からあったわけではありません。

私は、卒業論文のときからナチズム研究をしてきましたが、その中でも重視しているのがナチスのスローガンである「血と土 Blut und Boden」です。「血と大地」と訳されることもあります。私は Boden は「土」と訳した方が良いと考えています。なぜなら、ナチスは Boden という言葉に即物的なイメージを投影していたと考えているからです。食糧農業大臣のダレは化学肥料を使わない農業をやっつけようということを試みようとしたこともあるし、農学者も堆肥の重要性や「土壌の健康」を訴えていたこともあるので、ナチ時代、生態学や土壌学がそれなりに大事にされたと言えると思います。『ナチス・ドイツの有機農業——「自然との共生」が生んだ「民族の絶滅」』（柏書房、2005年）という博士論文を書籍化した本で書いたのですが、ナチス時代の農学の論文を読むと、たくさん土壌の話があります。たとえば、そこには“Lebensgemeinschaft”という言葉が出てきます。土壌というのは、生命（Leben）がいっぱい活性化している社会であり、ある意味“Volksgemeinschaft”の Leben ヴァージョンの印象も持ちます。

このように、生命体が作られる方ではなくて、壊れていくほうを見ていこうという思考様式は、結構探っていくと、いろんな思想家が言っています。

ここで一人だけ挙げるとすれば、フリードリヒ・フレーベルです。ロマン主義の教育者ですけども、彼は「積み木」を開発した人です。「積み木」というものは、実は完成体の物質であるとともに個々に分解される積み木のそれぞれがもう一回また別の物の成分に変わっていくという宇宙の摂理を表したものだということをフレーベルの文章を読むと書いてあります。それを遊ぶ場所が“Kindergarten”（保育園や幼稚園という意味）で、“Kindergarten”も彼が発明したものだですね。

分解者としての人間

生態学も基本的に生産者・消費者・分解者という三つのジャンルに生きものを分けると先ほど申し上げました。では、人間はこの図式の中のどこにいらっしゃるのでしょうか。普通は、人間は「消費者」の中に位置づけられております。私も中学校のときそのように習ったと記憶しています。ですが、人間は、他のほとんどの動物と同様に肛門と口をつなぐチューブであります。分解してもらって、これを生産者に託して、生産者がまた消費者の餌になっていくというこのフードチェーン、ないしはマテリアルなサーキュレーションをもたらしております。生態学の重要なところは、「中心がない」ということです。調和とも違います。自然の世界のことを「調和的な世界」という人が文系の人に多いのですが、生態学は基本的には調和とか調整ということよりは、むしろそれぞれ各々の利己的な行動の中の、気が遠くなるほどの数の複数性が担保されているに過ぎないということになります。人間もまた、このような複数性の担い手である「分解者」でもあるのではないか。

しかし、この分解者・生産者・消費者の三つに分けるというやり方は、先ほど申しましたように経済学にかなり引っ張られている説明の仕方です。また、生態学は「分解」というテーマを小さく見積もってきているように思います。つまり、消費者というのを、わざと生態学は分解者から切り離れたわけですが、しかし、ライオンにしてもキツネにしても人間にしても常時分解的な機能を果たしているわけであって、その果たしている機能を無視するということはやっぱりできない。しかも、植物や光合成細菌の光合成によってデンプンを作ることを「生産」と生態学では言うのですけれども、アルコールも分解者が生み出すものですよ。ですが、「生産」とは言いません。微生物が発酵しないとワインも味噌もパンもできないわけですが、分解の副産物なのです。副産物というのはおのずから勝手に生み出されてしまう排泄物なのですけれども、要するに、その排泄物としての副産物という「生産」があるのではないかと、ということを実は考えなくてはいけない。19世紀のヘッケルの「エコロジー」とは異なり、生態学は学問としては20世紀初頭に生まれて、ナチ時代にも重宝されましたが、生態学とはまさに“Lebensgemeinschaft”だとドイツの生態学者は言ったのですが、イギリスの生態学者から、“Gemeinschaft”というグループのメンバーというイメージになってしまうから違うのではないかと批判されています。こういう文脈からも、私は生態学を歴史的に批判すべきではないかというふうに思っているわけです。

人間社会の分解者

今度は目線を人間社会に移していきましょう。分解は人間社会にも当てはまるのではないかと。人間の中でもまさに分解を担う、ゴミを処理したりゴミをさらに分類して新しいモノを作ったりする人たちがいなければ一日たりとも成り立ちません。歴史的にもそう言えます。

「屑拾い」という職業があります。江戸時代から身分的に差別を受けていた人たちが、二本の箸を持って町中を歩き回り、屑を拾い、浅草に持って行って、職人に紙を漉き直してもらおう。紙

漉き職人は、トイレットペーパーにしていた。これを「浅草紙」と呼んだそうです。

明治・大正時代の資料を読みますと、屑拾いの人々が住む場所や作業をする場所は基本的にはコレラとかチフスのまさに衛生政策の対象でもあって、必ず消毒しないとイケないということが内務省、つまり、警察の管理下におかれていました。なぜ、警察の管理下に置かれていたかという、もう一つはゴミを集めて分類していくという分解の行為の中に思想的に「危険」な人物がよく混じっていると、その混じっている人物の情報を集めるにはバタヤ（これは大正時代くらいから出てくる、屑拾いを指す言葉だと言われています）をおさえておくのがちょうどいいというのが、警察の中で戦略的に考えられていたわけです。

親を失った子どもたちや、社会から遺棄された大人たちの屑拾いのコミュニティが戦後の東京にありました。「蟻の町」と呼ばれたコミュニティで献身的活動を行ったキリスト者の北原怜子が「蟻の街のマリア」と呼ばれて、映画になったり、劇になったりしました。

分解の世界にこそ、真の社会が存在するという考えは、日本だけではなくて、たとえばアルフレート・ゾーン＝レーテルという哲学者が、1926年にイタリアのナポリを訪れたときの感慨にもあらわれています。彼はこう言っています。「ナポリ人は、卓越した名人芸で、自分の所有する壊れた自動車を、街頭で見つけたような小さな木の棒という予想外のものを取り付けて、ふたたび走らせることができる。だがもちろん、当然のことながら、まもなくそれはふたたび壊れるだけだ。というのも、完全に修理してしまうことは、ナポリ人に嫌悪感をもたらすから。ナポリ人はむしろ完璧な自動車などハナからあきらめているのである」（Alfred Sohn-Rethel, *Das Ideal des Kaputten: Über neapolitanische Technik*, in: *Frankfurter Zeitung*, 21. März 1926）。

つまり、ナポリというのは完成されたものをすぐ嫌う。壊れているものを見ると落ち着く。壊れているものがあると愛着がわく。いろいろなものを、車を走らせてもすぐにいろんなものをくっつけてべたべた貼っていい加減な感じで物を使う。私は、ゾーン＝レーテルの文章を読んでいると、彼の心がどこか解放されるように感じます。

芸術行為としての分解

分解の哲学において、もう一つ重要なポイントは芸術です。人間社会から剥がれ落ちたものであるゴミや屑は芸術にとっても大きなインパクトがあったと思います。たとえば、クルト・シュヴィッターズという芸術家があります。この人はダダイズムを先導した人ですが、1920年代のベルリンで大真面目にゴミを拾って芸術作品に用いていた人です。クルト・シュヴィッターズの“*Merzbild Rossfett* (1919)”を見ると、ゴミをもう一度美的に昇華させていくという企みに、社会をひっくり返すような価値観の動揺が見られます。シュヴィッターズは、2000万人とも言われる人たちが亡くなり、これまでの政体も崩壊した第一次世界大戦後、あらゆる価値観が混乱し、破壊された世界の中で破片を集める仕事を続けます。破片を“*Melz*”と名付けて、*Melz*こそが私の革命だという彼は、バラバラになったものから何かを生み出すということで分解的な行動を考えているわけですね。ピカソもサドルとハンドルを雄牛のようにブリコラージュしている人でもあるし、今の日本では川辺などに落ちている様々なプラスチックゴミを魚としてインス

タレーションにしている淀川テクニクという芸術家もいます。

分解の世界は、自然、社会、芸術をつらぬいています。私たちの存在の奥深くまで、内臓の奥、毛細血管の先端まで入っていくようなテーマであるとともに、社会の中にも捨てられたものをもう一回再利用したり、捨てられたものをさらに分解していくという仕事が存在していて、そこは差別を受けたり、消毒をさせられたりするという意味で人間社会の奥地まで届くテーマだと思います。最近のSDGsのようなこれをどこか見えないようにしているエコロジーは、綺麗事に思えてしまいます。

また、2015年にEUが出したサーキュラーエコノミー（循環経済）と呼ばれているものがありますが、それは、今後の資本主義の一つのモデルとして日本でもかなり称賛されているのですが、循環経済というときの循環はあくまで分解が抜け落ちたうえで経済が循環しているということがイメージされていて、たとえばペットボトルをもう一回回収して新しいものを作るというその商品化の中での循環であって、商品化されていないものの循環はここには入ってこないわけです。

補足ですが、サーキュラーエコノミーのサーキュルはサークルという意味からきています。循環というと、トートロジー的に論じられやすいのですが、今までお話してきたように分解の世界が生み出す「サークル」はむしろ輪が閉じるというよりは、トートロジーにならない形でめいめいのプレイヤーがめいめいのことをしているうちにいつの間にかそういうふうな形になろうとしているという世界のこととして、そういうふうな偶然とランダムに支配された世界の円環的構造にほかなりません。

「したてやのサーカス」という現代サーカスは、この点ヒントを与えてくれます。私もこれに何度か出演させていただいたのですが、演じ手たちが真ん中で楽曲を奏でたり、デザイナーがミシンで布を縫い合わせたり、布を引き裂いて飾ったり、電球を用いた照明で神秘的な空間を醸し出したりするものです。ご飯を食べても、寝ても、笑っても、おしゃべりしても、演奏に参加してもいい。とても自由なサーカスです。サーカスというのは、もちろんご存知の通りラテン語の“circus”と同じ概念から来ているわけですが、円を描いて、みんなでその中心を見ながら、みんなで意見を交わしあったり、言葉を交わしあったり、視線を交わしあったりする場所だというコンセプト。サーカスの演奏と演出をしている曾我大穂さんは、出演依頼に私の研究室に来られたとき、ついでに文学部でやっている講義も見てもらったのですが、「話し手をもっと学生たちに溶け込んだらいいですね。観客は演じ手を見るだけではなく、同時に演じ手の向こうにいる観客たちも見ていないとサーカスではない。演じ手が人々をつなぐ役割を果たせるといいのですが、大学の教室の設計では難しいですね」と指摘されました。最近話題になった坂上香監督の映画「プリズンサークル」でも、男子刑務所で希望した受刑者たちが輪になって、番号ではなく名前と呼ばれ、それぞれがちょっとずつ自分たちの過去を語り、場合によってはお互いに演じながら自分たちの罪を見つめあっていくという「回復共同体 Therapeutic Community」という実践が扱われていますけれども、やはり、直線的な往復ではなく、ある人の話を、聴いている別の人の目を見ながら聞く、という複層的な「聞く」という行為のエコロジーが実践されていると私は感じました。いわば「精神のエコロジー」もまた、サーキュラーエコノミーとは違う形でのサークルのあり方を考える一つのヒントになるのではないかと考えています。

以上のような雑駁な予感をお伝えして、お話を終えたいと思います。ご清聴ありがとうございました。